



安政見聞誌

下

和書門		
三六七三三	二二八	三
號	函	架
類		冊

内閣文庫		
三六七三三	二二八	三
號	函	架
類		冊

内閣文庫	
番號	和 36733
冊數	3 (3)
函號	166 534

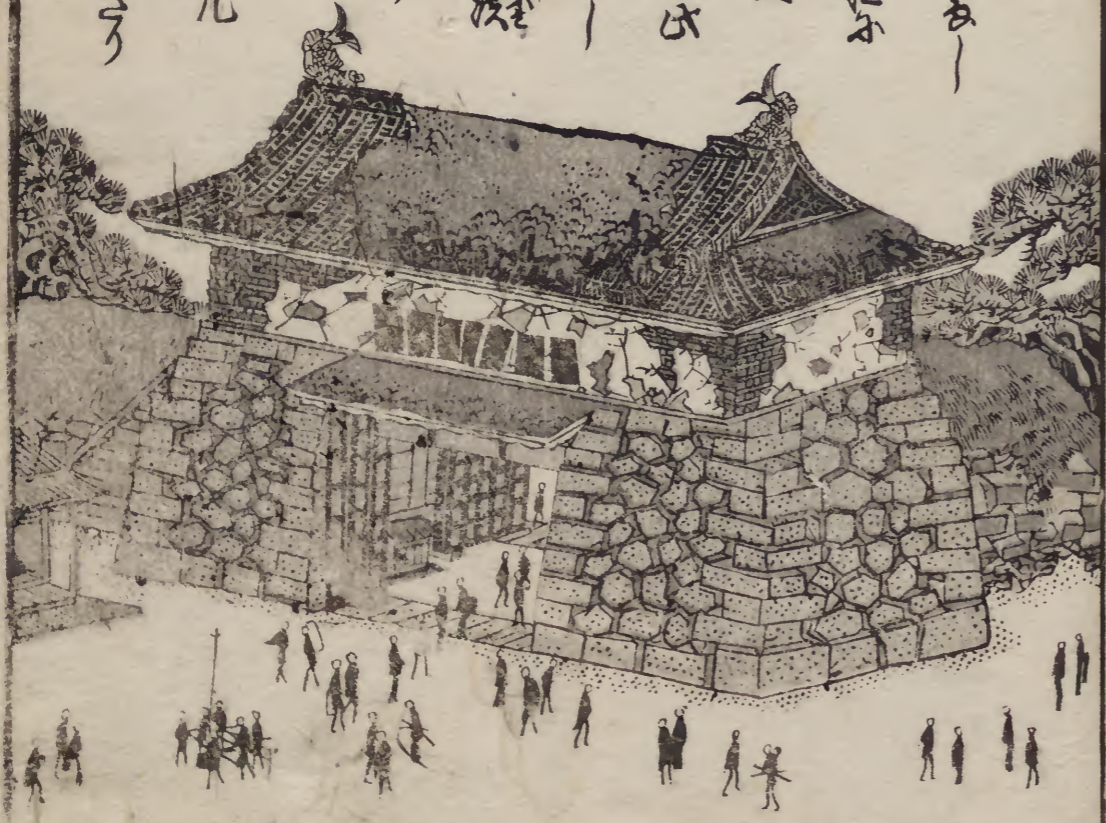
地一三四



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

同日

江戸御城の見附敷三千六百石あり
 はたの地長ふて何れも板敷きつる所あり
 物布一四谷口の橋之根より石垣あり
 石垣の長ふりやうたるおと一里又
 堅固なりと城門もたててのりたふし
 おとろくろりとも震動の強と弱
 改小六子東方馬場前門前の震渡
 其形おに放馬せし物と大破なり
 築りて長ぐり仕立より地震敷る
 有と唯今世のおとろく成りともさる九
 寺入國の築き形ありとさるなり



○今夜の地震にて破損の甚重
 なる事取分兼井丁の燈火
 の落ゆは西の方神明前まで
 二番丁門前丁の二日の夜あふ
 の二家の大道へ倒落すまことの
 木尾ふて山のおきくかいらまふ
 火災のあつりー各かたの屋
 かんまより度家の下ふらうそ
 怪我せし人も多し一まきんく
 在根のより持と突てお物の
 多を何て魚れを信又神明
 境内の如く破損の甚重なり



二番丁は南方七郎丁戸前中
 丁のあり初揺るたぬ破損の甚
 候森いお一総て火災の多し正
 物死しては甚重なり一地表小筋
 及び是小あり初揺るたぬ
 今夜あひ合さるのあり一あり

神威路のたふたをあきて

初めは國民清和

神一カ

とら川のたふた

法り致 飯倉



△電家下 藪小池色 穂原上 申下 登安 破損 悉 紀 了 終 了

△大津 寺 院 大 破 損 △万 年 山 寺 松 寺 同 下 △電 家 社 大 破

損 了 △三 縁 山 堀 寺 院 大 破 損 了 了 △切 寺 大 小

武 家 屋 大 破 損 △同 下 令 院 大 破

△新 橋 寺 院 大 破 損 △本 代 地 所 大 破 損 了 了

同 下 方 兼 房 所 寺 丁 寺 院 大 破 損 了 了 △疑 山 寺 院 大 破 損 了 了

方 折 半 寺 院 大 破 損 了 了 △同 下 伏 見 丁 寺 院 大 破 損 了 了

△丁 寺 院 大 破 損 了 了 △同 下 伏 見 丁 寺 院 大 破 損 了 了

△山 下 河 門 外 小 池 色 穂 原 上 申 下 登 安 破 損 了 了

一 尚 百 餘 年 費 文

一 小 姓 二 十 費 文

一 尺 裁 寺 院 了

一 殘 二 百 文 了

新 橋 寺 院 丁 寺 院

本 代 地 所

尾 師 六 右 衛 門

本 代 丁 寺 院 上 納 地

家 持 德 三 寺

一 葉 漢 一 格

一 生 姜 漢 一 格

一 楊 子 一 格

本 代 寺 院 破 損 了 了

下 德 寺 院 破 損 了 了

百 姓 寺 院

△三 田 寺 院 大 破 損 了 了 △有 馬 寺 院 大 破 損 了 了 △水 天 宮 寺 院 大 破 損 了 了

△寺 院 大 破 損 了 了 △同 下 伏 見 丁 寺 院 大 破 損 了 了

△寺 院 大 破 損 了 了 △同 下 伏 見 丁 寺 院 大 破 損 了 了

△寺 院 大 破 損 了 了

△樹 木 大 破 損 了 了 △同 下 伏 見 丁 寺 院 大 破 損 了 了

△池 上 寺 院 大 破 損 了 了 △同 下 伏 見 丁 寺 院 大 破 損 了 了

△令 於 橋 寺 院 大 破 損 了 了 △同 下 伏 見 丁 寺 院 大 破 損 了 了

△田 所 寺 院 大 破 損 了 了 △同 下 伏 見 丁 寺 院 大 破 損 了 了

△小 池 寺 院 大 破 損 了 了 △同 下 伏 見 丁 寺 院 大 破 損 了 了

△芝 下 寺 院 大 破 損 了 了 △同 下 伏 見 丁 寺 院 大 破 損 了 了

△一掃千百福 休門八幡社門 小救少者に施す 善き年月 米芝屋 音七

一岡 千五福 湯原小救少者に 岡 人

△柴井町右側と由き丁焼る為に仙臺松中倉安茶あて止る

△一全武茶々町内ト まゑ月丁 塚屋 茶

お、 茶茶々柴井町ト施す

一全武茶々町内ト 岡 丁 杵屋 茶

お、 茶茶々柴井町ト施す

△仙臺候 伊講慶邦 今度比表お月七 隣玉く 結張へは足跡
松板叔子牧多と申は出入有御子元御納戸令申て物申すお川門茶
此町より老才焼失子介は辰搦渡き必おく 疑深さるべきとて即日
此丸洞多し川玉茶 二年二月入 茶後々 新別小茶思ひく下さき

又町殿の若者人 異言云是あ令二分の儀下さるお年お武家方は後物の

撫るふおのてた叔多の妙意哉 結し 多人叔の報難哉叔ひあつて 結るの

さうと 歳源お結るの又結るお柴井丁の住長 函 弟 弟 渡世とせざる 何れ

多りの右叔を頂のく 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く

のりく ぬお残渡く 申りの 倉残 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く

知方へ ぬけんと 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く

無教をよふ 倉へん 見を 守る 友人とれを して 掃く 掃く 掃く 掃く

是知く 大守 とうの 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く

△法施 明石丁 十水丁 武丁 四方焼る 松平 法 掃く 掃く 掃く 掃く

然も 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く

掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く

町家 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く 掃く

西少一△同方仍種河為稻為坊濱丁若若川丁日少△人形丁邊丁
 青屋丁林木丁下破換為西多一△小綱丁濱江丁小舟丁辺若年燒失
 燒失也新家少人為西少一△小田系丁津久物丁江戶橋色破換の古為西少一
 △日本橋少方富丁十好者今川橋之之破換の古為西多一△支替丁濱河丁
 教書屋丁下通倉河岸全の内少破換為西多一△日酒方考鹽橋内城少破
 大破換漏弁たの換小宮系松系換上中尺破換夏目たを換破換△龍口南南
 傳奏屋為細川換兵後橋内秋元換松平傳是換大破換西多一△小江為西多長
 為渡手外破換△日酒方松平丹波換水田園換後換と抄換河抄換上
 為渡河是も破換為西多一
 四 大名小海河く破換為西多一△教書屋橋内永井堂の換本多申換換中けり
 松平右系換と井大換換大破換之元大長一
 五 八代河津岸定大清中 大林大為換是愛組の換是燒日西園別換本台燒
 と直りゆく止る 竜口南河初作勢換本多申換為西多一
 四 三河場少の内本多誠申換けり各本多妻慶換換被換換河井右系換
 大破換為西多一松平少總換内後代傳換中けり
 五 和田倉少の内松平紀後換日向少一尺日酒少の之張青西中けり松平換
 換上屋為大破換
 四 大島少の漏弁の難樂換日向多為若川少羽換燒△一ッ橋少の内行換
 少の換為少の内安少の内未破換あり是也為西少一
 △日酒少の方代者丁大破換為西多一
 △中花少の内大破換
 藩之外は為内町武家寺院高社所家老方と中相代漏方台後
 篇少殿主人一

西少一△同方仍種河為稻為坊濱丁若若川丁日少△人形丁邊丁
 青屋丁林木丁下破換為西多一△小綱丁濱江丁小舟丁辺若年燒失
 燒失也新家少人為西少一△小田系丁津久物丁江戶橋色破換の古為西少一
 △日本橋少方富丁十好者今川橋之之破換の古為西多一△支替丁濱河丁
 教書屋丁下通倉河岸全の内少破換為西多一△日酒方考鹽橋内城少破
 大破換漏弁たの換小宮系松系換上中尺破換夏目たを換破換△龍口南南
 傳奏屋為細川換兵後橋内秋元換松平傳是換大破換西多一△小江為西多長
 為渡手外破換△日酒方松平丹波換水田園換後換と抄換河抄換上
 為渡河是も破換為西多一
 四 大名小海河く破換為西多一△教書屋橋内永井堂の換本多申換換中けり
 松平右系換と井大換換大破換之元大長一
 五 八代河津岸定大清中 大林大為換是愛組の換是燒日西園別換本台燒
 と直りゆく止る 竜口南河初作勢換本多申換為西多一
 四 三河場少の内本多誠申換けり各本多妻慶換換被換換河井右系換
 大破換為西多一松平少總換内後代傳換中けり
 五 和田倉少の内松平紀後換日向少一尺日酒少の之張青西中けり松平換
 換上屋為大破換
 四 大島少の漏弁の難樂換日向多為若川少羽換燒△一ッ橋少の内行換
 少の換為少の内安少の内未破換あり是也為西少一
 △日酒少の方代者丁大破換為西多一
 △中花少の内大破換
 藩之外は為内町武家寺院高社所家老方と中相代漏方台後
 篇少殿主人一

明曆三兩年

正月十九日江戶火

火焼七十万八千金依之本所不

法宗山無極寺圓向院を焼く

右追福を修せしめ其の墓を其の所に移す

今彼の強札の右の高より取りこむる事あり

諸宗の寺院幾干あり其の中を加へ

一寺小五人宛集る所は廿万余と云ふ

是目あるも其の考へるべき

實も明曆より進小多きを修

初て修りありた其の火焼つてより其修を

幾共なく進小也又四半持小入車小の七其

香花院小送る客の心を其小欲にも余の

他邦の人は是を修るの心其小也

其其の修相をせしむるに眼を

見ると其の心其大敷と云ふ

修の遠くは其の心と云ふ



少府内火災と脱走人若小位居等まで

金部家入の遠とあまの金部家の事

比北不張の比保ふまの事 物中倉の事

あつ荒布指より四方とる物け下より倉の敷と

るる西の文化西の事 物け建家の敷板の取

止る事共震出揺落の土の散札と侍

実小敷懸小倉事の勿論古流下り安侍

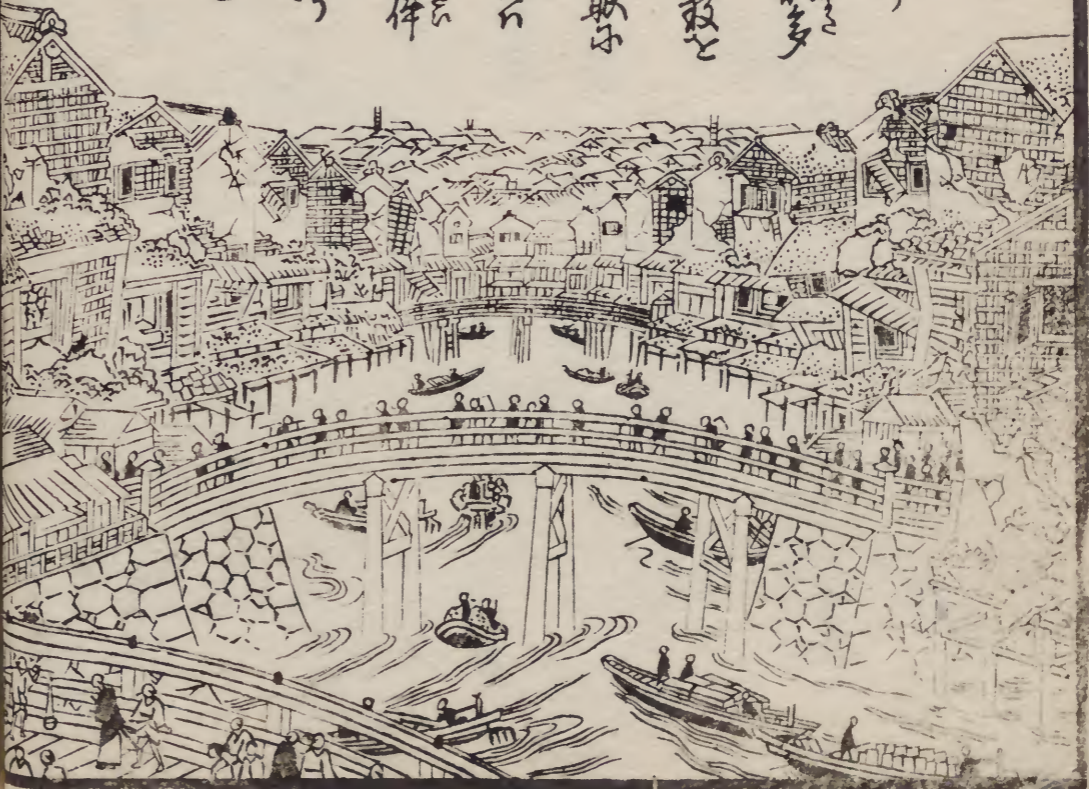
あつらとつとつとつ侍の又物とつとつ

若小あつとつとつ侍を玉の小あつとつ

新小小英賢あつとつとつ火災あつとつ

又侍殿といふべし

一層書 井田



△折をた青のりひ後書ふ物といふも高代の人人於実ふ知るものな

まづ二年末のりひ服系ふりる所あれば後人疑ふ必も有べし人系

しまとつとつとつ書の粗とあつ紀事○文政十二家年五月を系報を利始

○天保二辰年二月武系金を利始り因六末年七月百文残を利始

○同七年迄係不伴三月百文付系金八夕飢死の事多し是より

系七十六年係系天明二年の百文付三金又同七末年八百文付に金

を付序の係不米登とあつ毀撥札多し理由り然る不衣天保系年

稲基阿我松とて角力の大入大禁昌又芝居の中村款を雨の衣結

あつ大あつとつとつ風燧の体あつとつ是金く 公より小救の事厚

系不あつとつ○天保八酉年六五判を分報を利始り○同九戌年

系不伴百文付系に金八夕以救物○十二丑年十月十日より天

芝居の係系人智地所とて金を系拵仲り金係遠上小免とつり係

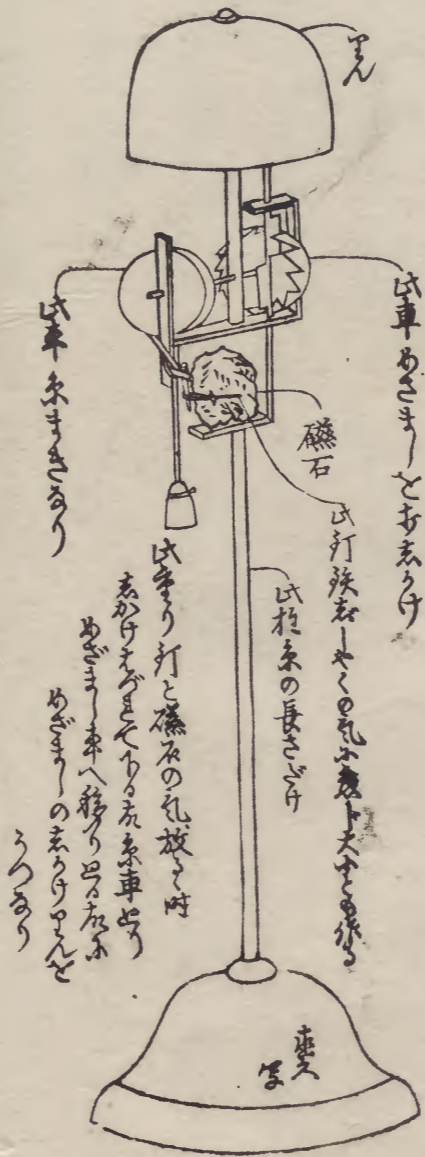
帝海で我家の御定申さくは其老女の養給ふごは有一旦我方引取
其と在末も愛し申事申さう一日申かた一見申所も其弁地致事申事
運送猶事な致居らうたう御愛の事申すの事痛まの事申さうの事申す
種か証事申すの難事とお助け申後致事方引取はことの誠心誠意の
あまう根十又救はらうひつとま太助の事申す事申す申す申す申す
此の事申すうう在御定事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
△中谷申すた丁橋事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
あまう申すて日未狂れのおとく成るた子か我取替の御事候事候事
あまう一色とあまう人日未の事候事候事候事候事候事候事候事候事
是の事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
一日子細事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
と候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事

△外事會全執院任凡世界の内不の致事候事候事候事候事候事候事
天の感無事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
さうと密事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
仏律の利益もあまう候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
△子知事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
或教亡又と愛あつた候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
愛つらうり愛あつた候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
叫一服と乞んとお候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
あまう然と愛もつらうりのおせあまう候事候事候事候事候事候事候事
乞も致事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
返せ候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事

△子知事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
或教亡又と愛あつた候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
愛つらうり愛あつた候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
叫一服と乞んとお候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
あまう然と愛もつらうりのおせあまう候事候事候事候事候事候事候事
乞も致事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
返せ候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事

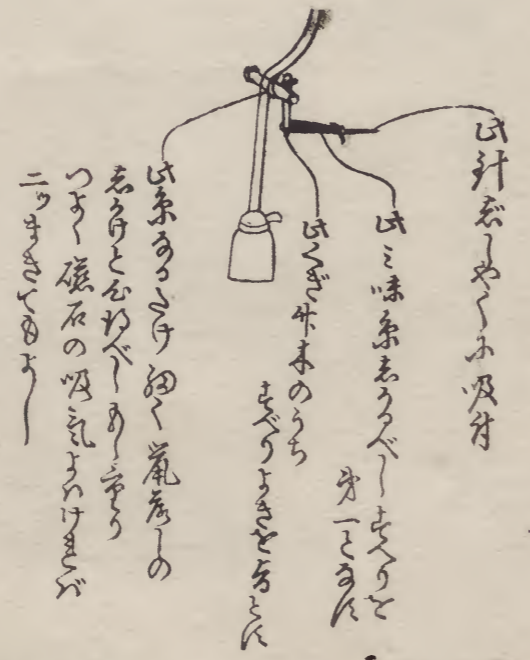
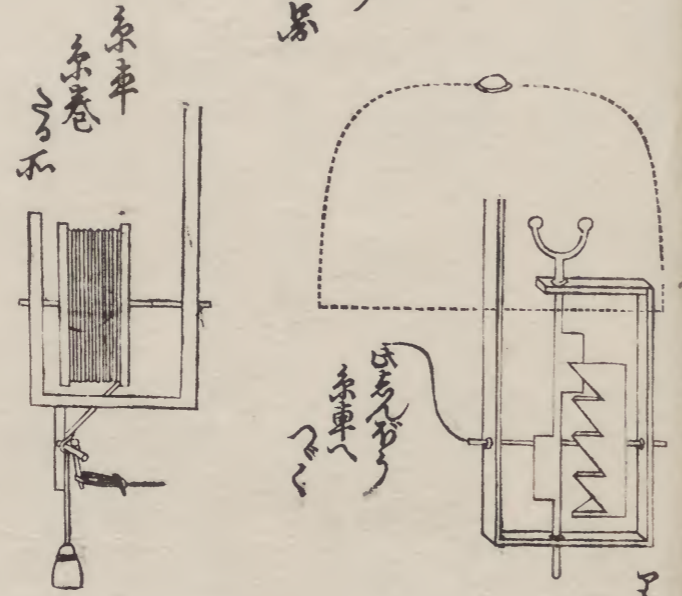
大名丸の目ふもあつて喜ひあつんと飛入るも疾と吸いねが虫の石
 空めく多くの車と揺るまはるる丸の筋らきくるお大まきる換毛
 をと心よりいば受る秋の時の大地震ありて後彼石不疾と吸まふ
 元のどくふ付ふよりて大地震ありて前あつて磁石疾と吸いざるを
 せよのゆゑのようはふ付て或人の地震時半とらふものを遠らん
 とくあつて石のまをふまはるるゆゑとて

地震計
全圖



まんの目目さきうあつてこの如く

車
分離
正面より
見る所



是等いよく読ふりか 圖を練 巨魁兵法とやらの者ふはしむじも
 二支と剣しきく 成就せざるやあらん 世のまふものしと画所
 車とのもと借りてそとをまはるる

△田舎前のある茶屋あり或人智籠不來者休息の後徳掛より
 又き出きてその村小智籠昇杖と建てる然よりあり湯出が亭を
 あり強ふひひるまじい息杖の穴と堀深ふあままの吹出その日の
 内小地とて流り下流るるありまじい後て井藩と然とて
 物ふは場ふの口改葬茶在八雲子の庭ありて堀井戸の在りし
 九折ひ小地なる所埋立し流のう是地農茶地を満て去きあ箱
 あり増て吹出ありのとは西を介小地不井戸のあり増る積多し
 ありあり

因ふ云佐良のゆと波小地農後井のあり減少あり春多とて軍
 が左ふ縣ありり役人出井戸毎小付流て一人として下を桶々吹と
 きて汲せしとあり是又小地の勢る友かふるゆもまじいありれば一振あり
 云給けまど何とも地農の端るれば是又ありまじいあり

△田舎中村大作の十月朔日
 西中あつて下総の中へある
 ありふ次の二日の夜右の地農と
 因ふあり十女ふ令集りて
 江戸へ遊るる多ふ十女
 いやまのや組ふとくのみ又日の
 馬下より中山と出出りてふ
 をあやうくまじい自給りて
 して車亦押上まを返るは
 夜更の下刺とありぬいと
 十女は天の疲最敵まのあり
 ありまじい腰と居るあり



華井長井時魚

